A Japanese American Pursuit for an “Americanness” in Post-WWII Hawai‘i: The Case of Watson Yoshimoto

（戦後ハワイにおける日系人の「アメリカ的価値」の探求：ワトソン・ヨシモトの生涯）

Eri Kato*

SUMMARY: Since WWII, Japanese Americans (JAs) have been generally praised for rising up from being plantation laborers to respected professionals, despite the many hardships they faced in white-dominant American society. However, recent scholarship, especially influenced by the theory of settler colonialism, argues for the need to reevaluate the “success” of JA history. The history of JAs in Hawai‘i needs to be understood in relation to the US project of expanding its political and economic powers in the Pacific. What did JAs do and how did they identify themselves in relation to other ethnic minorities and white settlers? To provide a more diverse perspective on JA history, this paper focuses on the life of a relatively unknown businessman, Watson Yoshimoto. I show how his life can be understood from the perspective of ongoing American domination of Hawai‘i and JAs’ involvement in its structure. JAs like Yoshimoto willingly embraced the value of American presence and power in the Pacific, so to assimilate themselves into “mainstream” American society.

* 加藤　恵理　Graduate Student, Graduate School of Arts and Science, The University of Tokyo, Tokyo, Japan.

はじめに

本稿では、ハワイの日系二世がアメリカ社会で自らの立ち位置を確立する上で、「男らしさ」の表象がいかに重要であったか、またそれを確立するために自らの人種観・エスニシティ観をいかに変容させていったかを、ハワイの日系人実業家の事例に基づいて分析する。

ハワイの日系人研究は20世紀初頭から始まり、とくに戦後のマイノリティ研究の高まりと共に盛んになった。これまでのハワイの日系人研究は、アメリカ本土の日系人と同様、彼らがマイノリティとしてアメリカ社会で受けてきた苦労や戦後の社会的地位の向上に焦点を当てる傾向があり、日系人は白人社会から差別を受けながらも、アメリカへの忠誠を誓い、勤勉である事でアメリカ社会へ同化した「モデルマイノリティ」として広く認識されてきた。[1] ここでいう「アメリカ社会への同化」とは、「白人社会への同化」と言い換える事ができ、それはマイノリティの白人化ともいえる過程だった。[2] しかし1970年代になると、ボブ・スズキやエイミー・ウエマツといった研究者らが、モデルマイノリティ論は本来多様であるマイノリティ像を本質化し、アメリカ社会における白人中心主義による差別を隠蔽する概念であると批判した。[3]

戦前から戦後にかけて、多くのハワイの日系人は白人と同様の社会的・経済的・政治的な力を獲得するようになった。彼らは「モデルマイノリティ」という言説を往々にして内在化し、ハワイでは日系人が先住民など他のマイノリティとの差異を強調するようになり、またエスニック集団内で利益を独占していると批判すらされるようになった。ハワイでは日系人の経済力や政治力が顕著であり、ハワイ史の研究者らは、日系人が「ローカル」[4] のアイデンティティを主張しマイノリティの声を代表する立場にありながらも、実際には白人と相互依存の関係にあると指摘した。[5] このような社会的背景に鑑み、ハワイ先住民を研究するハウナニ・ケイ・トラスクらは、ハワイをアメリカの植民地として様々な移民によって支配される「セトラーソサエティ」として捉えた。[6] トラスクはもともと搾取される立場にあった日系人を含む移民は、ハワイ先住民などのマイノリティを抑圧し、「ハオレ」[7] 同様にハワイをアメリカ本土の植民地としてきた「セトラーコロニスト」になったと批判したのである。[8] このように、近年、日系人を巡る語りは変化しつつあり、アメリカとりわけハワイにおける戦中、戦後の日系人史の見直しが進められている。

問題の所在と本稿の目的

ハワイの日系二世は､戦後はモデルマイノリティ､現在ではセトラーコロニストと呼ばれ、比較的一貫して、彼らのアメリカ社会への同化傾向が指摘されてきた。しかし、これまで「モデルマイノリティ」、とくに「セトラーコロニアリズムの担い手」として議論の対象となってきたのは、一部のエリートの日系人であった。セトラーコロニアリズム論を展開してきたトラスク、エイコ・コササ、イダ・ヨシナガなどは、日系人で初めて上下両院議員となったダニエル・イノウエや日系アメリカ人市民同盟ハワイ支部（Japanese American Citizens League-Honolulu）などの日系コミュニティの指導者らを取り上げ、彼らがハワイ先住民の権利を阻害してきたと指摘した。[9] 日系コミュニティは多様であるにもかかわらず、イノウエをはじめとする批判の対象となってきた日系人の多くは､従軍経験がある者､高等教育を受けた者､公職に就いた者など、アメリカ社会での「成功物語」を体現する存在であり、限定的な経験を持つ日系二世であった。しかし、戦時下で約12万人以上いたとされる二世のうち､従軍したのは2万人[10] に満たず､また高等教育を受けた者や、公職に就いた二世は一部に過ぎない。[11] より多様な日系人像を描き出すためには、戦争中から戦後にかけての「一般」の日系人に着目した研究が必要である。

1990年代以降の研究では、日系人はハワイの植民地化を担った「白人と相互依存の関係にある者」として批判されてきた。ただし、彼らが「白人と相互依存の関係」になった過程の分析は充分ではない。上述した先行研究からは、日系人が経済的利益や政治的影響力を追求した事で白人と相互依存関係になった事が読み取れるが、これらの利益を求めた背景にある、日系人の人種観やエスニシティ観を分析する事が必要であろう。本論文は、イノウエのような著名人ではない日系二世に注目し、彼らの人種観・エスニシティ観を分析する事で、戦中、戦後のハワイにおける日系人史を多角的に捉える事を目的とする。

本稿のケーススタディについて

本稿ではワトソン･ヨシモトという一個人の生涯に注目する。彼は、従来の日系人史で見落とされてきた、戦時中に従軍や強制収容を経験せず、戦後に高等教育も受ける事がなかった､「一般」の日系人であ

る。一方で、ヨシモトにはモデルマイノリティの型に当てはまるような、日系二世を語るときの「典型的」な側面もあった。それは、貧しい生い立ちを努力で乗り越え、経済的な成功を成し遂げるという生涯を送った事である。同時に、建設業界で成功を収めたヨシモトは、白人が権力の中心にいる社会構造を変革するのではなく、むしろ既存の社会構造を利用する事で、社会的・経済的な地位を確立した人物であり、セトラーコロニアリズムの担い手と捉える事もできる。

加えて、ヨシモトには日系人の人種観やエスニシティ観を考える上で、興味深い特徴がある。彼はスポーツハンティングを趣味とし、当時のアメリカを代表するハンターだったのである。スポーツハンティングとは、ヨーロッパの白人が植民地で行ってきた、白人による現地の土地や人々への搾取を象徴的に表すスポーツである。ヨシモトにとってのハンティングの意味を分析する事で、彼の人種やエスニシティへの意識を描き出す事ができるだろう。以上の論点に基づき、本稿ではこれまでの日系人史で注目されなかった日系二世であるヨシモトの生涯に着目し、ハワイの日系二世の人種観やエスニシティ観を明らかにする。

1．ヨシモトのビジネスに見る日系人のハワイ社会とのかかわり

ハワイの日系人史は、日系人移民が海を渡りサトウキビなどの農園で働いた過去を起点として語られる。その後、第二次世界大戦を契機に多くの日系人は社会的・経済的な地位を急速に上昇させ、戦後は農園を去った。ハワイ社会での政治的な発言力が増した日系人は、白人入植者と同じく「セトラー」と表現されるようになり、先住民や他のマイノリティからは、コロニアリズムを担う立場にある者として捉えられるようになった。[12] こうした日系人史の分析は、建設業界で成功を収めたヨシモトにも当てはまる。ヨシモトは貧しい少年時代を経て、建設業界の要職に就き、莫大な富を手に入れた。教育を満足に受けられず、経済的にも困窮状態にあった経験は、彼を平等な社会の形成ではなく、既存の社会構造内での成功へと導いたのである。

1-1. サトウキビ農園時代のヨシモト、「典型的」日系二世として

ワトソン・ヨシモトは、1909 年 6 月 6 日、ハワイのオアフ島の北東にあるプナルウに生まれた。両親は 1907 年に山口県からハワイに渡ったサトウキビ農園労働者だった。ヨシモトの幼少時代の経験の多くは、ハワイの典型的な日系人労働者に共通するものだった。家族の証言によると、当時は「食べるものに困るほど」貧しく、ヨシモトは「とにかくサトウキビ農園から抜け出したいと思っていた」ようである。[13] ヨシモトはハワイの小学校で「アメリカ人」としての教育を受け、同時に日本語学校にも通っていた。ヨシモトが学校に通った 1920 年代は、日系二世が日本語学校に通う事が日系人のアメリカ社会への統合を阻害する社会問題として議論されていた。すなわち、二世のアメリカ化を推進する動きが強まりつつある時期だった。多くの日系二世が公立学校で「アメリカの素晴らしさ」を教えられる一方で、親の故郷である日本を蔑む価値観を抱かされるような教育を受けた。[14] アメリカを讃美する教育は、言いかえれば白人中心的な教育であり、これに影響を受ける事で多くの二世は次第に白人を頂点に置き、非白人を卑下するような社会構造を受け入れていった。[15] このようなアメリカ化教育のなかで、多くの二世が「アメリカ人らしさ＝白人らしさ」を身につけようとした。アメリカ化運動が学校でも盛んだった時代に生まれ育ったヨシモトも、「白人らしさ」を身につけようとした日系二世の 1 人であった。

1-2. 戦前のヨシモトの建設業界への進出

1930 年代になると、二世のなかでも高等教育や専門的な訓練を受けた人々はサトウキビ農園を出て、より収入の高い仕事に就くようになった。特に建設業界に職を求めた日系人は多く、サトウキビ農園に次いで就職人口の多い職種であった。[16] ヨシモトもそうした新しい世代の 1 人だった。1925 年、彼は 14 歳で学校を中退し、大工見習いから始め、まもなく現場監督として仕事を任された。やがて、サトウキビ農園での仕事から完全に去り、建設業に身を投じ、サトウキビ農園の知人を通じて知り合ったポルトガル系アメリカ人が経営する会社に職を得た。

ヨシモトが就職した建設会社の社長であるヘンリー・フレイタスは、貧しいポルトガル系の移民の両親の間に生まれた二世であり、努力と勤勉によって建設業界で頭角を現した人物だった。[17] アメリカ本土でもハワイでも、マイノリティがエスニック集団のネットワークをもと

に仕事に就くケースが多く、一見、ヨシモトの就職は一般的なマイノリティのそれとは異なるように見える。しかし、人口構成が本土より複雑なハワイでは、エスニック集団の境界線がより曖昧であった事が、ヨシモトの就職先がポルトガル系アメリカ人の経営する企業であった事に影響していたと考えられる。ハワイにおいて、ポルトガル人はヨーロッパ出身とはいえ、アングロサクソン系の「白人」とは別のグループとみなされており、日系人と同じくサトウキビ農園の労働者として社会的ヒエラルキーでは格下として扱われていた。[18] そして地位の低いエスニック・グループ間では、ときに激しい競争がある一方、共感や結託が生まれやすかった。日系人のヨシモトが非日系の会社で職を得る事ができた背景には、このようなハワイ独自の事情があったと考えられる。ヨシモトが入社したのは、まだフレイタスが会社を興したばかりの時期であり、おそらく2人は共に上昇志向を持って建設業界で名を上げようとしたのだろう。建設会社で職を得たヨシモトは、寝る時間も惜しんで建築について熱心に勉強をしたという。[19] アメリカ本土にあるシカゴ工業専門学校（Chicago Technical College）からも通信教育の教材を取り寄せ、現場のみならず、学校教育を通じて建築の専門知識を身につけていった。

フレイタスの会社で働いた後、ヨシモトはラッセル・R・エイムス建設（Russell R. Ames Construction Company）に移り、1933年にはこの会社の取締役に就任した。その後、中国系アメリカ人の経営するW・S・チン建設（W.S. Ching Construction）で働いている。W・S・チン建設は、ホノルルのチャイナタウンのシンボル的建築であるウォー・ファット・チョップ・スイ（Wo Fat Chop Suey）ビル、当時の税務局庁舎、カラウパパ（Kalaupapa）港、オアフ刑務所やカウアイ島のカパア（Kapaa）刑務所など、今日のハワイでもよく知られる建物を手掛けていた。そして1940年には、ヨシモトはついに自ら会社を立ち上げ、建設業界の同業者ジェイムズ・タナカと共に、オアフ建設請負会社（Oahu Construction Company）を設立したのである。このように、ヨシモトは多様なエスニックバックグラウンドを持つ経営者の会社を渡り歩き、建設業界での基盤を築きながらも、会社設立に向けては日系人のパートナーを選んだ。この事について、ヨシモトの部下は「なにも不思議な事はない。日系人同士の方が色々やりやすかっただろうし、それは一般的だった。．．．．．． 当時は投資できる経済力を持った日系が出てきていたから、メリットもあったのだろう」と語っている。[20] ヨシモトの共同経営者が日系人であった事は、当時のハワイに

おける異なるマイノリティ同士の連帯の限界をも示す一方で、日系人が経済的・社会的な地位を独占するようになる時代の到来を予期していた。

1－3．従軍しなかったヨシモト

1941 年 12 月 7 日、ハワイの米軍基地が日本軍の攻撃を受けた事で、日系人の状況は一変した。アメリカ人であると同時に日本人としてのルーツを持つ存在である二世は疑いの目に晒され、それまで以上にアメリカ合衆国への忠誠心、「アメリカ人らしさ」を示す必要性に迫られた。真珠湾攻撃が起こる以前、二世の多くは「ハワイの日本人」というエスニック･アイデンティティを持っていたが、これを契機に「ハワイの日系アメリカ人」と自己を認識するようになったのである 。[21] ハワイに住む多くの日系人は、国債の購入、献血、ボランティアによる労働奉仕に献身的に取り組んだ。なかでも従軍は愛国心を示す行為とされ、ハワイでは本土と比べて圧倒的に割合が多い 1 万人近くもの日系二世が入隊を志願した。[22]

ヨシモトも、開戦と同時に「アメリカ人らしさ」を示す必要性を強く意識していた。ヨシモトの回顧録によると、開戦時、彼も軍へ入隊しようとした。そして「．．．．．．［真珠湾］攻撃の後に全てのアメリカ人男性がしたように、もちろん私も軍隊に入隊する事を望んだ」が、「年齢的な制限により、入隊する事ができなかった」と振り返っている。[23] ただし、当時のヨシモトは 32 才であり、実際には入隊は可能な年齢であった。彼が本当にそう思い込んでいたのか、あるいは敢えてそのように語ったのかは定かではない。しかし、軍への入隊を「アメリカ人男性の義務」として捉えながらも、それを達成できなかった事にある種のうしろめたさも感じていたようである。

ヨシモトが入隊する事を望んでいたのは、軍隊への志願が、アメリカへの忠誠心を社会に示す事以外にも、彼の社会的地位の向上にとって大きな意味を持っていたためだと考えられる。なぜならば、兵士として戦地に赴く事は、自らの「男らしさ」を示す事にも繋がったからである。[24] 特にアメリカ社会において男性性を否定されてきた [25] アジア系男性にとって、入隊は「男らしさ」を回復させる行為であった。[26] 実際に、戦中の二世兵士はハワイ社会で英雄視された。彼らは最も戦火の厳しいヨーロッパの最前線に送られ、軍隊内部でも敵国外国人の子孫として中傷を受けるなどの困難にみまわれた。[27] そのような状況で、第二次世界大戦で多くの負傷者と戦死者を出した日系人は、その

犠牲を以てアメリカへの忠誠心を証明したとされてきた。

だが、ヨシモトの戦中の経験は、英雄視された日系二世像とは大きくかけ離れたものだった。彼はハワイに残り、建設業で財を成したのである。第二次世界大戦が始まると、ハワイには島々の総人口を上回る軍関係者が滞在し、新しい住居の必要や彼らを対象としたビジネスが拡大したために、建設業界は好景気となった。こうした状況下で、戦前からハワイの経済を支えてきた日系人の労働力は不可欠であった。敵国外国人として差別を受けても、実際に職場から排除される事はほとんどなく、当時の建設業界でも大工の 80%は日系人だった。[28] ヨシモトが経営するオアフ建設請負会社もアメリカ軍の倉庫や兵舎などの建設にかかわっていた。戦中の仕事を振り返って、後にヨシモトは以下のように述べている。「オアフ建設請負会社は戦争中も会社として機能していた。．．．．．．個人的には私はアメリカと何の問題もなかった。」[29] このように、日系人が敵国外国人の子孫として警戒された戦時下においても、建設業は必要とされたために、ヨシモトの会社の経営は順調で、休日には趣味のハンティングに勤しんでいたほどだった。[30]

1－4．戦後の二世の社会上昇とヨシモトの会社の成長

1960 年代に入ると、日系人は飛躍的に社会的・経済的地位を上昇させ、ハワイの政治を動かし、後には他のマイノリティに「バナナ」、「中身は白人」と揶揄されるまでになった。[31] ハワイの日系人の歴史を語る際、戦中の二世兵士の活躍が注目されがちである。しかし、当時のハワイで生活する人々にとっては、むしろ戦後の二世の活動 [32] の方が日常的な社会の変化を伴うものとして体感できるものであり、ハワイの日系人のアイデンティティの形成に影響を与えたのではないか。ヨシモトは、戦後の日系人社会が蒙ったアイデンティティの変化を示す一例として、注目に値するものである。

戦後、ヨシモトはオアフ建設請負会社を個人経営するようになり、大きな成功を収めた。彼の活躍を支えたのは、ヨシモト自身の経営の才に加えて、戦後のハワイ社会全体の変化と日系人コミュニティの政治力の上昇だった。1950 年代は、ハワイの主要な産業が徐々にサトウキビ産業から観光産業へと移りつつあった時期であり、建設業界に多くの仕事が舞い込んだ。ハワイの州への昇格が目前に迫り、ジェット機の登場によって交通手段が飛躍的に発達した事もあり、観光産業が注目を浴びるようになっていた。ホテルやショッピングセンターな

どの建設が必要とされたために不動産ブームが起こり、ヨシモトのような建設会社の経営者に大きな利益をもたらしたのである。[33] 当時のハワイにおける建設業界の主な担い手は、それまで支配的だった白人から、アジア系、とくに日系人に代わっていった。これは建設業界だけでなく、政界などを含むハワイ社会全体に見られた変化だった。

戦前のハワイでは、伝統的にサトウキビ農園経営者らが支持していた共和党の一党支配が続いてきたため、白人権力者層の利害に見合う政治が行われていた。しかし戦後は、こうした共和党の独占状態を打破しようと、戦争の英雄とされた日系二世が中心となり民主党が活発な政治活動を始めた。アメリカ軍として勇敢に戦った事を評価され、強い発言力を持つようになった二世の退役軍人や、「GI ビル」によってアメリカ本土の大学や大学院で学び、ハワイに帰ってきた二世が、民主党の政権交代のために重要な役割を担った。こうした日系二世の活躍によって、民主党は 1954 年のハワイ議会選挙で共和党に勝利し、この年の議会のほぼ半数を日系議員が独占した。[34]

二世による社会の変革が肌で感じられる環境にあって、ヨシモトは当時活躍した二世らと自分との違いを意識したに違いない。ハワイに残り、順調に仕事を続けたヨシモトと比べて、英雄視された二世らはアメリカ本土で厳しい訓練を受け、ハワイを離れ遠い戦地で名誉の負傷を負い、戦後は本土で教育を受けてハワイに帰ってきた。従軍や教育を通じて「島の外の世界（something more than the island culture）」を見た彼らは、ハワイの社会構造を変える原動力となった。[35] こうした大きな違いがあったにもかかわらず、戦後、ヨシモトは彼ら「英雄」と共に日系二世としてくくられ、協力関係となり、彼らの活躍の恩恵を受けてビジネスを発展させていった。こうした状況で、ヨシモトは日系二世のアイデンティティに自覚的になり、また「二世の経験」を補う方法を模索し始めたのではないだろうか。ビジネスでの成功はそのためのものであろう。

戦後、多くの日系人が建設業界でも高い地位を占めるようになり、ハワイの観光地化が進むにしたがって、政界との繋がりを持つようになった。[36] ヨシモトも政界と密接にかかわっていった二世の 1 人だった。[37] 当時のオアフ建設請負会社は、ホノルル市やアメリカ軍から主に水道建設関係の工事を請け負っていた。日系議員がハワイ領議会のほぼ半数を占めた 1954 年、ヨシモトはハワイの建設業界の団体であるジェネラル・コントラクターズ・アソシエーション（General Contractors Association、以下、GCA と略）の幹部に就任した。GCA

とはアメリカの建設業界で最も長い歴史を持つ米国建設業協会（The Associated General Contractors of America）のハワイ支部であり、1932年に設立されて以来、建設業界において大きな影響力を持ってきた。このGCAの幹部になる事で、ヨシモトは建設業界での立場を確立した。また、翌年の1955年には、政府の大型プロジェクトとして注目されていたパリ・ハイウェイ（Pali Highway）の工事を受注している。[38] 日系人の政治的影響力が高まるなか、ヨシモトのビジネスも大きな恩恵を受けていたのである。

上述したように、ヨシモトはハワイの観光開発を進める多くの工事を受注した。しかし、ハワイでの建設作業のなかでも、ヨシモトの行っていたような高速道路建設などの大きな工事は、ハワイ先住民の聖地や墓地をブルドーザーで掘りかえすことでもあり、しばしば非難の対象ともなった。実際、20世紀後半のオアフ建設請負会社の仕事内容を知る人物は、「高速道路の工事では、おそらく墓も掘り起こしていた．．．．．．ハワイはそんな土地ばかりで［ハワイ先住民の墓などを］避けようがなかった」[39] と述べ、ヨシモトがそうした工事にかかわっていたことを示唆している。また、建設業者の活動はハワイの観光地化を促進し、地元住人の立ち退き問題などを引き起こした。ヨシモトのビジネスの成長の裏には、ハワイの先住民の土地や生活の犠牲があった。その意味で、彼は「白人と相互依存関係者」とにある典型的な二世であった。

1960年代以降もオアフ建設請負会社の経営状況は良好で、ハワイの日系向けの新聞や *Star-Bulletin* や *Honolulu Advertiser* などの地元の主要な新聞は、会社に関する記事を多く掲載した。ヨシモトの会社はオアフ島各地の新しい道路工事、貯水池工事、商業地区開発、大規模な住宅建設などを次々に手掛けていた。1963年にはW. T. ヨシモト株式会社（W. T. Yoshimoto Corporation）を設立し、これを親会社として、オアフ建設請負会社を含む4つの子会社を運営するようになった。1987年には、W. T. ヨシモト株式会社はハワイで成功している建設会社上位25社として紹介され、その翌年には、ハワイの主要ビジネス誌 *Hawaii Business* で、建設業以外の業種を含む全ての州内企業で最も成功している会社の1つに選ばれた。[40] こうした成功は、彼の評価に大きな影響を与えていた。筆者がヨシモトの周囲の人々にインタビューした際、彼らは決まってヨシモトのビジネスでの業績について語っている。大工見習として建設業界に入り、後にハワイで最も成功した会社の経営者となったことに言及し、異口同音に「セルフメイ

ドマン（叩き上げの人）だった」と表現した。[41]

ここまでヨシモトのビジネス面の動向に注目し、貧しい生い立ちから富を築くまでの過程を描き出した。既存の日系人研究では、第二次世界大戦で従軍した二世の体験や、日系コミュニティが大きな犠牲を払い、その後に社会上昇を成し遂げたという語りが強調されがちである。しかしヨシモトは、英雄視された二世らとは異なる戦時を体験した。軍に入隊できる立場にありながら、年齢を理由に従軍が叶わなかったと発言していたのは、単なる誤解ではなく、彼が戦争に行かなかった事にうしろめたさを感じていたことを示唆している。日系人男性にとって、軍での活躍は男性性の回復と密接にかかわっていたが、ヨシモトは「男らしさ」を証明する機会を逃してしまったのである。戦後は戦地から帰還した二世のハワイ社会での活躍を目の当たりにし、日系アメリカ人としてのアイデンティティを意識するようになった。そして活躍の目立った二世らと同じように、ビジネスを通じて社会的影響力のある立場に自らを押し上げた。

彼が戦後「成功したビジネスマン」になったことには、ヨシモトにとって経済的な価値以上に大きな意味があったと考えられる。ビジネスでの成功によって、彼はアメリカにおいて「男性の美徳」とされてきた「賢さ」や「勤勉さ」、「経済的な独立性」を周囲に示すことができた。周囲からは「セルフメイドマン」と形容され、それはまさに賢さや勤勉さによって経済的独立性を得た男性を讃える表現であった。ヨシモトは、ビジネスマンとして成果を出したことで、当時の日系二世の多くが示そうとしたアメリカ人としてのアイデンティティを表現していたと考えられる。しかしそれは同時に、ヨシモトをハワイの土地や先住民の生活に犠牲を強いる立場にした。このようにして、労働者に生まれたヨシモトはハワイの建設業界を牽引する資本家となり、いわばセトラーコロニアリズムを体現する存在となってゆくのである。

２. ヨシモトのハンティングに見る日系二世のアメリカ化

1950 年代から、ヨシモトは手にした資金の大半を趣味のハンティングに注ぎ込むようになった。彼のハンティングのスタイルは、もともと「local hunting（地元のハンティング）」と呼ばれる、銃もガイドも使わないものだったが、裕福になるにつれて、「スポーツハンティング」というヨーロッパやアメリカ本土の白人富裕層が主に行うもの

へと変化していった。本節では、ヨシモトのビジネスにとどまらず、ハンティングという趣味を通して彼の人種やエスニシティに対する意識、また本土やハワイへの意識がどのように変化していったのかを考えたい。

2−1．サファリを紹介する新聞記事

スポーツハンターが「本場」の地として最も憧れるアフリカのケニアとタンザニアで、ヨシモトが初めてハンティングを行ったのは1958年である。ヨシモトのアフリカへの旅行はハワイで大きな注目を浴びた。1958年1月、「ハワイからアフリカサファリに向かう人々（図1）」という記事が *Honolulu Advertiser* に載った。[42] 共にヨシモトを含

DR. MASAO HAYASHI
MRS. HAYASHI
BERNARD THOM
MRS. THOM
WATSON T. YOSHIMOTO
MRS. YOSHIMOTO

Islanders To Go On African Safari

図1：「ハワイからアフリカのサファリに向かう人々」（*Honolulu Advertiser*, January 6, 1958.）

むアジア系の男性3人がそれぞれの妻を同伴した姿の写真も掲載された。本記事中で、ヨシモトたちはハワイから初めてアフリカへのサファリに向かう人々として紹介され、日程の詳細が記載された。「40日間のサファリ中、2人に付き1人の［プロフェッショナルハンター］[43]がガイドする。．．．．．．ハンター［ヨシモトら］はサファリに同行する現地の人々（natives）に1日10ポンドの肉を渡す契約になっている。1日のハンティングが終わると、現地の人々は肉を乾燥させ、家族のところへ持って行くのである。」そして、ヨシモトらが現地の天候の心配をしていることや、当時はまだ珍しかったカラー写真で現地の様子を撮る予定であることなどを紹介している。

同年3月末、彼らのサファリを紹介する記事が再び掲載された。この記事はヨシモトがナイロビから *Honolulu Advertiser* に向けて送った手紙をもとに書かれており、「ホノルルアンが無事にサファリを終えた（図2)」というタイトルがつけられた。[44] 掲載された写真には、現

Taking part in the safari were, standing from left, Bill Morkel, guide, W. T. Yoshimoto, Bernard Thom, Mrs. Yoshimoto, John Lawrence, guide, and kneeling, Dr. Masao Hayashi.

Honolulans End Successful Safari

FRI MAR 28 1958

A completely satisfactory safari is reported by a group of islanders who are now readjusting themselves to civilization in Nairobi, Kenya, after having been in the bush for 40 days.

In the group are Mr. and Mrs. W. T. Yoshimoto, Bernard Thom and Dr. Masao Hayashi. They left Honolulu early this year. With the safari completed, members of the hunting party will separate and complete their travels on their own, returning to the islands on different dates.

• • •

Mrs. Yoshimoto writes, "The safari was interesting and enjoyable with never a dull day. The food was excellent, comfort in camp excelled our expectations and everything was well supplied.

"Our outfitters, The White Hunters (Africa) Ltd., provided us with two of the best professional hunters, Bill Morkel and John Lawrence. Both are excellent, experienced hunters who have taken out hunters from almost every country of the world,

図2：「ホノルルアンが無事にサファリを終えた」（*Honolulu Advertiser*, March 28, 1958.）

地のプロフェッショナルハンター2人とサファリウェアを着た姿のヨシモトら一行が確認される。冒頭は「アイランダーから完璧に満足なサファリであった、という報告が届いた。現在ヨシモトたちはジャングルの奥地で過ごした40日から再び文明社会に順応できるようナイロビで過ごしている」と始まり、ヨシモトの文章が引用され、サファリがいかに充実したものだったかが記載された。ヨシモトは、手紙のなかで自分が雇ったプロフェッショナルハンターが世界各国の皇室の人々をガイドしてきた人物であり、1950年に上映された映画『キング・ソロモン（*King Solomon's Mines*）』などに出演した経験もある事を書いた後、ヨシモトがそのプロフェッショナルハンターにとって初めてのハワイ出身の客であった事を報告した。「彼[プロフェッショナルハンター]はハワイ語以外のほぼ全ての言語が喋れたので、私たちは『アロハ』と『オケレマルナ（乾杯）』を教えた」とある。

これらの記事が新聞に掲載された事や、記事の内容が伝えるサファリの様子からは、ヨシモトにとってハンティングが自らの「成功」を示す手段であった事が読み取れる。ハワイの有力紙に記事が掲載された事で、日系人を含むハワイの人々に対して、自分が経済力を持っている事、また富裕層のハンティングを趣味とする「白人」の一員である事を示した。ヨシモトと彼の友人であるアジア系の男女の一行は、ハワイで社会的・経済的に優位とされる白人でも成し遂げた事のないアフリカ旅行に出かけた。掲載された1枚目の写真の男性らの蝶ネクタイやポケットチーフを挿したスーツ姿は、ハワイの気候や文化に合うものではなく、いかにも西洋の紳士的な雰囲気を作ろうとした印象を与え、当時の日系人を含むハワイの人々から見て、成功した日系人像を体現していただろう。

2枚目の記事の写真はヨシモトが現地から送ったものである。ヨシモトと彼の妻そして友人2人が、著名なプロフェッショナルハンターらに挟まれ、サファリウェアを着た姿が写っている。アメリカにおいて、スポーツハンターは19世紀後半から「真のアメリカ人男性像」として関連付けられてきた。[45] 例えば、26代大統領セオドア・ルーズヴェルトや小説家のアーネスト・ヘミングウェイなど、経済的にも社会的にも地位の確立された人々がアフリカやインドなどの遠方でハンティングを行い、男性的なハンター像を強化してきた。そのため、プロフェッショナルハンターらとの現地での写真は、ヨシモトの「男らしさ」を視覚的に読者に訴え、また彼が自らを白人と同等の立場にある事を伝えるものだった。

ただし、白人と同等の立場を示す事は、ヨシモトが白人を頂点に置いた人種意識を内在化し、強化する事と表裏一体でもあった。記者が取り上げたエピソードには、ヨシモトがアフリカで現地の人々への報酬として、彼らが家族と食べるための肉を渡す、というものがある。ここでは現地の人々は市場経済とかかわらない「未開」の人々として描かれている。ヨシモトらは、そうした「未開」の人々と対照をなす者として描かれた。アフリカの現地の人々は「ジャングルの奥地」に留まる存在で、ヨシモトらは「再び文明社会に順応」する存在として読者に伝えられている。記事はヨシモトが直接執筆したものではないが、結果的にヨシモトはこうしたアフリカの人々を「未開の人々」とする表象の一部を担い、彼らとの対比を通して自らを文明社会の側に置いていた。

2-2. サファリの習慣

ヨシモトの「完璧に満足なサファリ」とはどのような旅行だったのか。ヨシモトはサファリのための資金は惜しまず、アフリカで最も老舗であり、1950 年代のハンティング界で高い評価を得ていたケニアのアウトフィッター、ホワイトハンターズ（White Hunters）を利用した。[46] アウトフィッターとは、ハンターのサファリの準備や現地でのサポートを行う会社である。有力なハンティング会社の社名が「ホワイトハンターズ」である事から、アフリカにおいてスポーツハンティングが白人のスポーツである事を前提としていた事がわかる。ホワイトハンターズの人脈を通じて、ヨシモトは旅行中、ホテルのロビーやレストラン、キャンピングサイトなどの様々な場面で世界から集まるハンターに出会った。そして、アメリカのハンティングクラブで有名なハンターやホワイトハンターズの常連客などと親睦を深めたのである。

サファリではたくさんの人を同伴させ、そこでの人間関係を通じて、ヨシモトは「白人」側としてのアイデンティティを強化していった。典型的な同行者は、プロフェッショナルハンターが 1 人、現地の地形に詳しいガイドが 1 人、そして細々とした事を手伝う「ボーイ（Boy）」と呼ばれる多数の地元の者であった。ボーイはヨシモトの事を「ボワナ・ヨシー（Bwana Yo-Shee）」と呼んでいた。「ボワナ」とは敬意を表すために名前の前につけるスワヒリ語で、ルーズヴェルト元大統領もサファリ中には「偉大な主人 (Bwana Makuba)」と呼ばれていた。[47] ヨシモトはボワナと呼ばれた事を誇らしく思ったようで、自身の伝記

にもこのエピソードを記述している。

サファリの日常からは、ハンティングをする白人を頂点に捉えた文化が読み取れる。サファリでの典型的な一日の流れは以下のようなものだった。まず早朝に起床し、ヨシモトとプロフェッショナルハンターは動物を発見するために現地のガイドやボーイを引き連れ、車で獲物を探しに出かけた。獲物を見つけ、ヨシモトの撃った動物が倒れると、ボーイはすぐに息の根が本当に止まっているかを確認しに行った。確認が取れると、プロフェッショナルハンターとヨシモトがその場に出ていき記念撮影をした。記念撮影が終わると、今度はボーイらが死骸の処理を行った。昼ごろになるとキャンプに戻って、シェフが昼食にその日の獲物を料理した。毎日のメインディッシュは獲れたての動物であった。食後はしばらくリラックスして過ごし、またハンティングに出かけ、朝と同じように動物を捕り、太陽が沈む頃にキャンプに戻ってきた。熱いシャワーを浴びて、時には現地で知り合ったハンターを交えてカクテルを飲み、午後の獲物を夕食として食べた。食事のテーブルにはテーブルクロスがかけられ、ナイフやフォークなどが並べられ、まるで都市のレストランにでもいるかのようだった。ヨシモト夫妻やプロフェッショナルハンターが食事を満喫している最中、その日サファリで着ていた服はボーイらによって綺麗に洗濯され、翌日までにはアイロンがかけられていた。このように、ヨシモトはアフリカ滞在中、テントでの生活環境にもかかわらずアメリカの都市のホテルにいるのと変わらないような待遇を受けていた。

ヨシモトは、41 日間のサファリで大自然に囲まれつつ、ハンティングに伴う骨の折れる作業を現地の人々に任せてサファリを満喫していた。「ボーイ」や「ボワナ」などの名付けに象徴されるように、海外からのハンターやプロフェッショナルハンターと現地の人々の間には、あからさまな力関係が見られた。ヨシモトはそこで白人のハンターらと同じ特権的な立場を満喫し、自らが彼らと同等の立場にある事を確認し、「偉大な白人ハンター（the great White hunter）」[48] のような自己を周囲に示す事ができた。ヨシモトはハンティングを通じて、アメリカ本土やヨーロッパから来ているハンターたち、また世界各国の皇族などを顧客に持つプロフェッショナルハンターに対して、ハワイ出身の日系人が彼らと同じ立場にある事を示したのである。

2-3. トロフィールーム

1958年のサファリ以降、ヨシモトは世界各国を巡り、最終的には400体以上の動物を集めた。動物は世界各国で狩猟され、アメリカ本土の会社によって剥製にされ、ハワイのヨシモトの自宅に届けられた。剥製をアメリカ本土に送ってからハワイに輸送するには時間も費用もかかった。剥製師はアフリカなどの現地にもハワイにもいたが、ヨシモトは本土の一流とされる剥製師にこだわったのである。ハンティングを始めた当初、剥製は彼の自宅の居間やオフィスの一角に飾られていたが、次第に数が増え、間もなくトロフィールームが作られた。トロフィールームとは多数の剥製を所持するスポーツハンターが持つ剥製専用の展示室である。ヨシモトは毎年その部屋でクリスマスパーティーを開いており、そこには主に本土やハワイのハンターらが集まっていた。[49]

トロフィールームは、ヨシモトが世界各地で活躍してきた事をハワイの人々に示す部屋であった。英雄視された二世兵士と同じように、ヨシモトも「島の外の世界」を知っている事を印象づけるものだった。図3の写真にはハワイを想起させるものが1つもない。動物は全てハワイ外の土地で集められたものであり、ハワイ出身であるヨシモトの

図3：ヨシモトと彼のトロフィールーム（1981）（国立科学博物館蔵）

格好も、「正装もアロハシャツ」と言われるハワイにいながら、揃いのスーツにベストとネクタイを身に着けており、まるでアメリカ本土かヨーロッパの紳士のようである。トロフィールームの写真の剥製コレクションとヨシモトの風貌は、トロフィールームがハワイから切り離された空間であった事を暗示しているとも言えるだろう。

図3は、1981年のトロフィールームの写真である。これだけの数と種類と質の剥製を展示するトロフィールームを持つハンターは限られていた。トロフィールームの写真を集めた写真集 *Great Hunters: Their Trophy Rooms and Collections* には、他の35名のハンターのトロフィールームと共にヨシモトの部屋が紹介され、編者は同書に名を連ねた人々を、ハンティング業界のリーダー的存在として称賛している。[50] ヨシモトはこの本に掲載された事を誇りに思い、同書を複数購入し、友人に配っていたという。

本土のハンターから、本土やヨーロッパのハンターの一員として高い評価を得る事は「アメリカ人らしさ＝白人らしさ」とう考えに影響された世代のヨシモトにとって大きな意味があった。ハワイにおいて、ハワイ出身の白人は「白人（White)」ではなく、「ハオレ」と表現される事が一般的である事からもわかるように、ハワイと本土の白人は違うカテゴリーで捉えられる傾向がある。[51] 本土の白人の方が、「本土」であるだけに、ハワイの人々から見て「よりアメリカ人らしい」イメージがあり、ヨシモトは彼らの一員となる事でハワイのハオレよりも、より「白人」である自分をハワイの人々に向けて表現できた。同時に、本土のハンターに向けては、立派なトロフィールームを持つ事で、ハワイ出身の日系人でも「偉大な白人ハンター」のような経済力や素養がある事を証明しようとしていた。つまり、高い評価を受けるトロフィールームをハワイに作る事で、ヨシモトはハワイの人々に、そして本土のハンターに向けて、ハワイでも本土と同様あるいはそれ以上の事が達成できる事を証明していたのである。このように、ヨシモトはトロフィールームを通じて、ハワイの日系人が本土のアメリカ人に劣らない事を表現できた。しかし同時に、ハワイを思わせるものが何もないトロフィールームは、ヨシモトのハワイとの距離を表すものだったとも言えるだろう。

結論

以上、ハワイの日系二世であるワトソン・ヨシモトの生涯を、彼のビジネスとスポーツハンティングに焦点を当てて考察してきた。ヨシモトは戦争前後の好景気を契機に、建設業界で莫大な財産を得た。彼は、英雄視される日系二世のように従軍を通じてアメリカにおける「男らしさ」を示す事はできなかったが、戦後は二世の政財界での活躍の波に乗ってビジネスで成功した。その成功により、自他共に「セルフメイドマン」として認識された事は、ヨシモトにとって「アメリカの男らしさ」を証明し、二世の従軍経験を補うものだったと考えられる。しかし、ビジネスでの成功は、アメリカによるハワイの植民地化を進める一助を担う事に繋がり、ヨシモトはセトラーコロニアリズムを担う日系人の1人となった。アメリカにおける価値を体現しようとした事が、ヨシモトにハワイの植民地化のプロセスの一端を担わせたのである。

また、ヨシモトは、ビジネスで得た財産を趣味のスポーツハンティングに費やした。アフリカなどの「未開の」土地で、裕福な白人ハンターの一員のように振る舞い、現地の人々を他者化し、自らを白人側に位置づけた。ハンティングで集めた剥製やトロフィールームは、ビジネスでの活躍と同じように、ヨシモトの「男らしさ」を表すものだった。同時に、剥製のコレクションは、本土の人々にハワイの日系人が本土の白人と同等の功績を残せる事を示すものでもあった。ヨシモトはハンターになり、ハワイにトロフィールームを作る事で、日系人が白人に、またハワイの日系人が本土のアメリカ人に劣らない事を示していたのである。

ビジネスでの成功とハンティング業界での活躍は、単なる生きる術としての仕事や趣味というだけでなく、ハワイの日系人男性がアメリカ社会での居場所を見つける手段であった。また彼のハンティングを分析すると、彼が日系人と白人、ハワイと本土との間にある境界線に対して挑戦していたと考える事ができる。こうした居場所探しと、境界線を揺るがす行為を通して、ヨシモトは本土の白人の一員のように振る舞った。それは、結果的にヨシモトを「セトラーコロニアリスト」にしたのである。

Notes

1 モデルマイノリティ論については William Pettersen, “Success Story, Japanese-American Style,” *New York Times*, January 9, 1966　や　Harry Kitano, *Japanese Americans The Evolution of a Subculture* (Engleweed Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1969) を参照。

2 20 世紀半ばまでに「白人」の絶対的な優位性が認識されるようになり、アメリカ化＝白人化の構図が形成された。この研究は Matthew Frye Jacobson, *Whiteness of a Different Color: European Immigrants and the Alchemy of Race* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1998) を参照。

3 モデルマイノリティ論への批判については Bob Suzuki, “Education and Socialization of Asian Americans: A Revisionist Analysis of the ‘Model Minority’ Thesis,” *Amerasia Journal* 4, no. 2 (1977): 23–25; Amy Uyematsu, “The Emergence of Yellow Power in America,” in *Roots: An Asian American Reader*, ed. A. Tachiki (Los Angeles, CA: UCLA Asian American Studies Center and the Regents of the University of California, 1971) を参照。

4「ローカル」とは、人種やエスニシティに限定されないハワイの地域性を強調したカテゴリーとして､主に二世以降の世代からハワイで生まれ育った人々を指す言葉として浸透した。Jonathan Y. Okamura, *Ethnicity and Inequality in Hawai*‘*i* (Philadelphia, PA: Temple University Press, 2008), 113.

5 Haunani-Kay Trask, “Settlers of Color and ‘Immigrant’ Hegemony: ‘Locals’ in Hawai‘i” *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000): 2.

6 Ibid.

7 ハオレとはハワイで「白人」を指す言葉として一般的に使われる言葉である。Okamura, *Ethnicity and Inequality in Hawai*‘*i*, 24.

8 Candace Fujikane, “Asian Settler Colonialism in Hawai‘i” *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000): xv–xxii.「セトラーコロニアリズム」とは様々な意味を含むが、ここではコロニアリズムの構造において、本来搾取される側として流入した移民らによるコロニアリズムを指す。

9 Trask, “Settlers of Color,” 7-8; Ida Yoshinaga and Eiko Kosasa, “Local Japanese Women for Justice (LJWJ) Speak Out against Daniel Inouye and the JACL,” *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000): 143-46.

10 第二次世界大戦を通じて、3 万 3000 人の日系兵士が参戦し、その内の半分がハワイ出身者だったという。中嶋弓子『ハワイ・さまよえる楽園：民族と国家の衝突』（東京書籍、1993 年）、190 頁。

11 Gary Y. Okihiro, *Cane Fires: The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945* (Philadelphia, PA: Temple University Press, 1992), 140-41; Eileen Tamura, “The Americanization Campaign and the Assimilation of the Nisei in Hawaii, 1920 to 1940” (PhD dissertation, University of Hawai‘i at Manoa, 1990), 227-29.

12 Trask, “Settlers of Color,” 2.

13 筆者によるグラディス・サトウ氏へのインタビュー。（2013 年 2 月 8 日）

14 Tamura, “The Americanization Campaign,” 195-97.

15 Okihiro, *Cane Fires*, 56.

16 James Okahata, *A History of Japanese in Hawaii* (Honolulu, HI: United Japanese Society of Hawaii, 1971), 200.

17 フレイタスは建設業界で業績を上げ、その後政界にも進出した人物である。彼は 1953 年から 1955 年までハワイ州議会の上院議員を務めた。“The Pokiki: Portuguese Traditions,” *Islander’s*

Magazine, http://www.islander-magazine.com, accessed August 1, 2013.

18 Gay Reed, "Fastening and Unfastening Identities: Negotiating Identity in Hawai'i," *Discourse: Studies in the Cultural Politics of Education* 22, no. 3 (2001): 331.

19 サトウ氏へのインタビュー。

20 筆者によるウェンデル・カム氏へのインタビュー。(2013 年 2 月 11 日)

21 矢口祐人『ハワイの歴史と文化:悲劇と誇りのモザイクの中で』(中央公論新社、2002 年)、97 頁。

22 Roland Kotani and Oahu Kanyaku Imin Centennial Committee, *The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle* (Honolulu, HI: Hawaii Hochi, 1985), 95-100.

23 Watson Yoshimoto, *Yoshi* (Long Beach, CA: Safari Press, 2002), 8.

24 Jon Robert Adams, *Male Armor the Soldier-Hero in Contemporary American Culture* (Charlottesville, VA: University of Virginia Press, 2008), 8-9.

25 David L. Eng, *Racial Castration: Managing Masculinity in Asian America* (Durham: Duke University Press, 2001), 16.

26 Kathy E. Ferguson, *Oh, Say, Can You See?: The Semiotics of the Military in Hawai'i* (Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 1999), 160.

27 日系部隊の活動について詳しくは、Linda Tamura, *Nisei Soldiers Break Their Silence: Coming Home to Hood River* (Seattle, WA: University of Washington Press, 2012) を参照。

28 Okihiro, *Cane Fires*, 242.

29 Yoshimoto, *Yoshi*, 201.

30 Ibid.

31 Okamura, *Ethnicity and Inequality*, 132-33.

32 戦後は本土の著名な大学で学位を取りハワイ大学で教職に就いたり、弁護士になったり、公職に就いたりした二世の活躍が目立った。Franklin Odo, *No Sword to Bury: Japanese Americans in Hawaii* (Philadelphia, PA: Temple University Press, 2004), 253.

33 Noel Kent, *Hawaii Islands Under the Influence* (Honolulu, HI: University of Hawai'i Press, 1993), 165.

34 Ibid., 130.

35 Tamura, "The Americanization Campaign," 398.

36 Kent, *Hawaii Islands*, 132.

37 ヨシモトが家族ぐるみで親しかった人物のなかには、後にホノルル市長を長く務めたフランク・ファッシーがいた。ヨシモトはファッシーをはじめとする政治家に頻繁に献金をしていた。こうした政治家への支援は、1950 年代からヨシモトの会社が政府や軍関係の大きな仕事を受注するようになっていた事と無関係ではない。

38 "Further Widening of Nuuanu Ave. Is Next Pali Rd. Project," *Honolulu Advertiser*, March 6, 1955.

39 カム氏へのインタビュー。

40 "Oahu Construction: Riding the Crest of Growth," *Building Industry Digest*, May 1987; "The 250 Largest Public and Private Corporations in Hawaii," *Hawaii Business*, May 29, 1988.

41 セルフメイドマンとは、恵まれない社会環境に生まれた者で、自助努力と勤勉によって特権階級のような「成功」を得た人物の事を指し、アメリカの英雄像の 1 つと考えられている。渡辺利雄、「英雄としてのフランクリン:セルフ・メイド・マンの虚像と実像 (アメリカの英雄〈特集〉)」『アメリカ研究』第 11 号 (1977 年)、1–15 頁。

42 "Islanders to Go on African Safari," *Honolulu Advertiser*, January 6, 1958.

43 サファリ中のガイドを務め、動物をしとめる手助けをするハンティングを職業とする人々を指す。

44 “Honoluluans End Successful Safari,” *Honolulu Advertiser*, March 28, 1958.

45 Daniel Justin Herman, *Hunting and American Imagination* (Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press, 2001), 276.

46 ヨシモトはこのサファリに多額の資金をつぎ込んだ。当時のサファリにかけるスポーツハンターの平均金額は 1,500 ドルから 1,800 ドル以下だったが、ヨシモト夫妻が支払った金額は 1 万ドルを超えていた。この平均金額は 1965 年当時のもので、今の値段で 19,278 ドルから 23,134 ドルである。ヨシモト夫妻が支払った合計金額は現在の値段に換算すると 173,679 ドルである。*Bureau of Economic Analysis* を参照。

47 “Roosevelt Arrives: Family Is with Him,” *New York Times*, March 15, 1910.

48 「偉大なホワイトハンター」とはハンターの間で、一般的にアフリカなど遠地で活動する白人ハンターを表す用語であり、白人の特権的な立場を「偉大な／すばらしい／身分の高い（Great）」ものとして表している。現代では皮肉を込めて使われる事が多い。Ruth Mayer, *Artificial Africas: Colonial Images in the Times of Globalization* (Hanover, NH: University Press of New England, 2002), 88-89.

49 家族によると、パーティーをいつから始めたかは定かではないが、1970 年代後半には毎年恒例のようになっていたそうである。

50 Safari Press, ed., *Great Hunters: Their Trophy Rooms and Collections* (Long Beach, CA: Safari Press, 1997), 8-13.

51 例えばハワイの白人は local haole と呼ばれ、本土の白人は mainland haole と呼ばれるなどのカテゴリー分けがある事が指摘されている。Okamura, *Ethnicity and Inequality*, 24.